



Nagoya City University Academic Repository

学位の種類	博士 (看護学)
報告番号	甲第1840号
学位記番号	第24号
氏名	遠藤 晋作
授与年月日	令和3年3月24日
学位論文の題名	先天性心疾患をもつ学童期までの子どもに対して母親が行う病気説明の構造 (The Structure of Disease Information Provided by Mothers to Their Children with Congenital Heart Disease until School Age)
論文審査担当者	主査： 堀田 法子 副査： 香月 富士日, 明石 恵子, 門間 晶子

学位論文内容要旨

論文題目 先天性心疾患をもつ学童期までの子どもに対して母親が行う病気説明の構造

教育研究分野:成育保健看護学

氏名:遠藤晋作

研究目的

先天性心疾患をもつ子どもにとって、母親からの病気説明は重要な病気の情報源である。母親は子どもの成長に合わせて病気説明を行うが、子どもの学童期の成長にともなって病気説明に難しさを感じるようになり、学童期の後半以降の子どもの病気理解が不十分な現状が報告される。しかし、経過や影響要因、説明者である母親の病気理解を含めた病気説明の全体的な概念構造は明らかにされていない現状がある。

本研究の目的は、先天性心疾患をもつ学童期までの子どもに対して母親が行う病気説明の構造を学童期までの経過を踏まえて明らかにすることとした。その意義は、明らかにした概念から母親が行う病気説明の難しさを軽減するための支援を示唆でき、子ども自身が病気理解を向上し、セルフケアや自我同一性確立などの、疾患を持ちながら成長・自立していく上で重要な要素を補うことに繋がることにある。

第一研究-1

先天性心疾患をもつ学童期までの子どもに対して母親が行う病気説明プロセス

先天性心疾患をもつ学童期までの子どもに対して母親が行う病気説明プロセスを明らかにすることを目的とし、疾患をもつ10～12歳の子どもの母親4名に半構成的面接を行い、SCATの手法を用いて分析した。母親は医師から病気説明を受け、自発的な情報収集を行うが断続・漸進的な理解向上しか望めず、子どもが学童期になっても理解追求が停滞する不全的な病気説明理解状態にあった。その背景には疾患衝撃による理解阻害、病気理解の追求困難、医師母親間の信頼関係形成困難があり、母親は幼児期までの子どもに対する日常生活に即した内容中心の病気説明を、学童期までに日常生活に即した内容と不十分な医学的知識が共存した病気説明に変容させていた。またその病気説明は成長に付帯する病気説明選択要因に影響されていたことが明らかになり、その具体的支援の示唆を得た。この成長に付帯する病気説明選択要因は子どもの成長発達と関連性があるため、学童期までの経過を踏まえて子どもに対して母親が行う病気説明の構造を検討するためには、成長発達が与える影響について、さらなる検討が必要と考えられた。

第一研究-2

先天性心疾患をもつ子どもに対する病気説明における母親の情報認識プロセス

母親が子どもの病気の情報をどのように認識しているのかは明らかにされていないため、母親による病気情報認識のプロセスを明らかにすることを目的とし、疾患をもつ8～12歳の子どもの母親6名に半構成的面接を行い（第一研究-1の2次データ4名を含む）、SCATの手法を用いて分析した。母親が病気情報の認識を不全的理解から説明実施可能へ移行するためには、理解の向上、必要性の認識、手段の確立の3つの条件が必要であることが明らかになった。これらを補うことが医療者による支援の針路となる

と考えられるが、特に必要性の認識に対する支援を母親は認識していなかったため、意識的な支援が必要となる。

第二研究

先天性心疾患をもつ学童の社会適応能力が母親による病気説明の実施基準に与える影響

—医学的知識の説明に焦点を当てて—

第一研究-1より、断続・漸進的であっても「子どもの疾患について理解」を得ていくことと、「成長に付帯する病気説明選択要因」が病気説明の実施基準となると考えられた。また学童期の成長発達においては、知的な能力も含めて、子どもの広がっていく社会への適応能力が重視されていくと考えられる。さらに、第一研究-1では、学童期の病気説明は日常生活に即した内容と不十分な医学的知識が共存した病気説明であるため、特に医学的知識の説明が難しくなると考えられる。以上を踏まえ、不十分な医学的知識に焦点を当て、学童期の子どもの社会適応能力が母親による病気説明の実施基準に与える影響を明らかにすることを目的とした。疾患をもつ学童期の子どもの母親に無記名自記式の質問紙調査を行い、71名より有効回答を得て、量的に分析を行った。子どもの社会適応能力はASA 旭出式社会適応スキル検査（A. 言語スキル、B. 日常生活スキル、C. 社会生活スキル、D. 対人関係スキル）を用いて、病気説明の実施基準は第一研究-1で明らかにした成長に付帯する病気説明選択要因をもとに作成した項目に、子どもがもつ病気に対する理解度を合わせた項目を用いて質問した。各項目、得点が高まると病気説明の実施基準が高まるように明瞭な言葉で表現し、当てはまりについて6件法で過去の経過を経た「今現在のこと」が評価できるように設定した。

病気説明の実施基準の因子分析の結果、第1因子「母親の説明コミュニケーション能力」、第2因子「子どもの説明受容力」、第3因子「子どもの説明アクセシリテラシー」が示された。このことから母親はまずは自らの説明コミュニケーション能力に依存し、そこに子どもの能力を合わせて説明実施を判断すると考えられた。そして抽出した因子を従属変数、社会適応スキル、交絡因子を独立変数とした重回帰分析の結果、第2因子「子どもの説明受容力」に対し、言語スキル、社会生活スキルが影響を与えていた。また第3因子「子どもの説明アクセシリテラシー」に対し、言語スキル、日常生活スキルが影響を与えていた。このことから①疾患ゆえに必要となる専門用語や表現を含めて、言語スキルの向上を図ることで「子どもの説明受容力」「子どもの説明アクセシリテラシー」の基盤を整える、②病気管理も含めて自分の身の回りのことを自立して行えるように日常生活スキルを高めていくことで「子どもの説明アクセシリテラシー」を向上させる、③社会生活スキルを高めることで子どもの成長と共に広がりをもたせる社会生活への適応を支持して「子どもの説明受容力」を向上させることが重要な支援であると考えられた。

全体考察

本研究では、まず先天性心疾患をもつ学童期までの子どもに対して母親が行う病気説明プロセスを明らかにした。またその中にある「病気についての理解」と、「成長に付帯する病気説明選択要因」が病気説明の実施基準となり、この病気説明の実施基準は子どもの社会適応能力に影響を受けていたことを明らかにした。そしてこのことから、子どもの成長発達に配慮した支援方法が示唆された。しかし、より対象に合わせた支援を実施するためには、病気説明を受ける側の子どもを対象とした検討が今後必要となると考える。